紅色の風月下

式織　檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅色の風月下

【Ｎコード】
Ｎ８４４６Ｅ

【作者名】
式織　檻

【あらすじ】
高校生、橘羽樹が夜道で出くわした異様な光景。それは『マンイーター』シャルロット＝ランの〈食事〉だった……。※この作品はダークエンドを目指しております。また、残酷な表現を含みます。ご注意ください。

プロローグ

僕は、褒められるのが大好きである。

友人もそれほど多くなく、異性への興味も人並み。趣味も特にないし、スポーツもほとんどしない。そんな僕にとって『褒められる』ということは我が人生における唯一の快感、自分の存在価値を確認するたった一つの機会だったのである。

だから、中学で僕が陸上部に所属していたのも校内マラソンでそこそこの結果を残して褒められたからだし、高校の進路選択で理系を選んだのも数学で高得点を取って褒められたことがあったからである。あるいは、毎日ちゃんと学校に行ってるのだって小学校の頃に皆勤賞を取って褒められたことがあったからだ。

今までの十八年間、いつ、どこで、どんな理由で褒められたのか、僕は一つ一つ覚えている。そのシチュエーションを詳しく覚えている。十年前のことすら、僕は鮮明に覚えているのである。

かようにして、僕にとって『褒められる』ということはとかく重要なことだった。

大切なことだった。

大好きなことだった。

だから、僕は思いもしなかった――

――この僕が、褒められて嬉しくないなんてことがあるなんて。

〈そいつ〉は、にたりと笑いながら僕を褒めてきた。

「うわっはははははは。なかなかなもんじゃないか、お前。驚いたぜ」

街灯一つない真っ暗な路地裏。赤っぽい満月だけが周囲を照らす

静寂の中、〈そいつ〉は、紅色のロングヘアーを夜風になびかせながら言ってくる。

「いやいや、お前みたいのはなかなかいないぜ？　普通の奴は逃げるか、へたり込むか、気を失うかだぞ。それを、お前は平然と立ってられるんだからな。いやいや、すげえぜ」

そう言いながら、〈そいつ〉は依然として〈食事〉を続けている。八重歯からは赤い汁が滴り落ち、歯の隙間から肉片がのぞき、服にも赤い染みがついていた。その鋭い犬歯で肉を引き裂き、骨を噛み砕き、汁を吸っているのである。もぐもぐ、ばきばきと、狼や虎やジャッカルのような、野生を感じさせる食いっぷりだった。彼女が手に取り口に運んでいるものは、もはや僕をしてもただの食料にしか見えないほどぐちゃぐちゃになっていた。

「どうした？　つっ立ったまま何も言わねえで。……もしかして、お前も食いたいのか？　だったら分けてやるよ。ほれ」

そう言って、〈そいつ〉は大きな塊を僕の方に投げてくる。
僕の足元にごろりと転がるモノ。〈それ〉は、驚愕と恐怖の表情に固まったままの、二十台と思われる女性の頭部だった。頬には（恐らく自身の）血が付着し、数分前まではサラサラだっただろうその黒髪は枯れ果てたようにボサボサになっていた。洗顔も化粧もトリートメントも、もはや無意味なほどに変わり果てた女性の顔だった。

「……どうした？　食わねえのか？　だったら返してくれよ、それ。……つーか、お前、何かしゃべったらどうだ？　ほら、アタシって〈こんな〉だからさ、最近まともに他人と話すことがなかったんだよ。最後に人と話したのがいつだったかなんて覚えてないくらいに

な。多分、数十年前だったと思うけど……。だからさ、久しぶりでアタシも嬉しいんだよ。何か話してくれって。なあ？」

そう言いながらも、〈そいつ〉は〈食事〉を継続している。

見た目は十代後半から二十代前半。僕としては親近感のわく年頃だ。顔立ちもきれいだし、場合によっては僕も積極的に声をかけていたかもしれない。お近づきになろうとしたかもしれない。しかし――――その行為は、それを覆して余りあるほど異様なものだった。

僕は何も言えず、ただ立ち尽くしてそれを眺める。

なおも肉を引きちぎり、骨を咀嚼し、血で舌なめずりをする紅色の髪の女。闇に溶け込む黒いレザーの上着を汚しながらも、手と口は休めない。赤い月に照らされるその光景は、夢か幻のように、まったくと言っていいほど現実感のないものだった。

僕は見とれるように、ただただその光景を瞳に写し続ける。

ただただ、満月の下に立ち尽くす。

――これが、『マンイーター』シャルロット＝ランと、僕、橘羽（たちばな）樹（はねき）の邂逅だった。

第一話「僕の部屋」

「ぐあああー、また負けたー！」

僕の部屋。シャルロットはテレビ画面を睨みつつ、ゲームコントローラーを握りながら唸った。

僕は慌てて、

「お、おい、あんま叫ばないでくれよ。下の階には僕の家族がいるんだから」

「だってさぁ、こいつ、卑怯な技使ってくるんだよー」

「いいから、とにかく黙ってくれって。親にバレたら、お互い困ることになるだろ？」

僕がたしなめると、シャルロットは口を尖らせながら、

「けっ、分かったよ」

と答えて、再びゲームに集中した。

つい三十分前、僕の部屋のベランダから（僕の部屋は、一戸建て家屋の二階に位置している）侵入してきたこの迷惑女は、さっきからずっとテレビゲーム（なぜか、こいつは格闘ゲームにご執心なのである）にかまけているのである。何か用があってウチに来たのかと思ったのだが、こいつは僕への挨拶もそこそこに、いそいそとゲーム機の電源をオンにした。どうやら、ゲームをするためだけにここに来たようである。迷惑この上ない。

僕は現在高校三年生であり、大学受験を半年後に控えていて、ようは受験勉強の真っ只中なのである。今だって、机に向かって物理の問題集をこなしていたところだ。そんな最中にこんな奴に部屋に

押し入ってこられて、迷惑でないわけがない。折角の夜の静かな時間がぶち壊しである。できれば今すぐ帰ってもらいたい。
しかし、

「……なあ、今夜は何で僕の部屋に来たんだ？」
「お前に会いたかったから」
「他には？」
「お前の顔を見たかったから」
「他には？」
「お前と話したかったから」
「他には？」
「ゲームしたかったから」

二人の男が殴り合いを繰り広げているゲーム画面から視線を外すことなく、あっけらかんとシャルロットは答えた。
僕は嘆息しながら、

「……ゲームならいつだってできるだろ？　別に、今日じゃなくてもいいじゃないか。だから、今日はお引取りを……」
「……何だ、アタシに命令すんのか？」

ふと、ゲーム画面をポーズさせ、剣呑な表情で振り返ってくるシャルロット。
僕は慌てて、

「え？　いや、命令ってわけじゃなくて……」
「お前、いつからアタシに命令なんてできるようになったんだ？」
「いや、だから、命令じゃなく……」
「アタシのことが気に食わないってのか？」
「め、滅相も……」

「何だったら、今からお前のこと食ってもいいんだぜ？」
「いや、違う、違うって……」
「もしくは、下のお前の家族を食っても――」
「分かった、分かりました！　どうぞごゆるりとお楽しみください！」

僕が言うと、シャルロットはにんまりと笑い、ゲーム画面に顔を戻した。
……まったく、冗談で言ってるのか本気で言ってるのか分からない。冗談にしては笑えない。しかし、僕は一度こいつの〈食事〉の場面を見ただけに、無下にはできないのである。こいつが本気になれば、僕は次の瞬間に肉塊になるのだ。だから、こいつの要求にはできるだけ素直に答えなければならない状況なのである。
僕はため息をつきながら、再度物理の問題集に意識を戻した。
――と、

「ぐあああー、また負けた～！」

再び唸りながら、シャルロットはコントローラーを放り投げた。そしてそのままバフッと、僕のベッドに仰向けに寝っ転がる。
僕はそれを横目で眺めながら、

「……おい。ベッドに寝転がること自体は別に構わないけど、その服、きれいなのか？」
「服？　失礼だな。アタシだって女だぞ。身だしなみにはちゃんと気を使ってるよ」
「つったって、お前、根無し草なんだろ？」
「ちゃんと川で洗ってるっての。水浴びもしてるしな」
「ふ～ん……」

僕はシャープペンをカリカリ動かしながら、
「……つか、川で水浴びって、人に見つからないのか？」
「そんな覗き野郎はとっくにアタシの腹の中さ」
言いながら、シャルロットはパンパンと腹を叩いた。得意のジョークを言い終えたかのように、くくくと笑っている。……しかし、やはり僕には笑えない。
と、
――く～、きゅるるる～
その腹が鳴った。
シャルロットは、叩いていた腹を今度は丸く撫で回しながら、
「あ～、腹減ったな～」
「……そう」
「腹減ったな～、腹減ったな～」
「そうか」
「腹減ったな～、腹減ったな～、腹減ったな～」
「分かったよ」
「腹減ったな～、腹減ったな～、腹減ったな～、腹減ったな～」
「分かったって」
「……何だよ、そのぞんざいな反応は？　何だったらこの際、お前のこと食っちゃおうかな～？」
シャルロットはむくりと上体を起こしながら、僕に視線を向けてきた。ぴくりと釣り上がり、一瞬にして『友人』ではなく『食物』を見る目つきに変わる紅の瞳。
ぞくりと、僕の背筋に冷たいものが走る。
しかし、シャルロットはすぐに目の色を戻し、すくっと立ち上がった。そして椅子に座ったままの僕を後ろから抱きかかえてきて、

頬に頬をぺたりと密着させながら、

「うっふふん。……さて、今私が言った『食う』ってのは、どっちだと思う？」

「……どっち、とは？」

「あっははは。とぼけるなよ。分かってんだろ？　もちろん、人間の三大欲のうちの、睡眠欲以外の二つさ」

僕の肩に回した腕に力を入れてくるシャルロット。その紅の髪が僕の首筋に絡みつき、染み付いた血の匂いが鼻腔を刺激してくる。

「前も言った通り、アタシはここ数十年他人とコミュニケーション取ってなかったからさ。両方とも満たされてないんだよね、アタシのカラダ。疼いちゃってさあ。……んで、お前はどっちの方がいいんだ？」

「ど、どっちって、そりゃあ……」

僕が言いよどんでると、

『ご飯よ～』

階下から母さんの声。

僕は慌ててシャルロットの腕を振り払い、

「あ、はい。今行く」

と返した。そして立ち上がり、部屋を出ようとドアノブに手をかけながら、

「じゃ、じゃあ、僕は夕飯だから」

「そうか。んじゃあ、アタシも出掛けるかな」

そう言ってベランダのガラス戸を開け、部屋から出て行こうとするシャルロット。

僕は振り返りながら、

「……出かけるって、どこへ」

「うわっはは。決まってるだろ――」

シャルロットはにやりと僕に笑いかけてきて、

「――アタシも食事だよ」

第二話「ファーストコンタクト」

月曜日の放課後。

一日のカリキュラムもつつがなく終了し、僕は帰り支度をしていた。

あんな人食い女と知り合い、馴れ合っているにも関わらず、つつがなく高校生活を続けているのは自分でもどうかと思うが、しかし……しょうがない。選択肢がない。僕にはどうしようもない話なのである。

――なぜなら、あいつが〈人食い女〉だから。

逆らおうものなら、一瞬で僕はあいつの腹の中だろう。抵抗できるとも思ってないし、逃げ出したところで食われるのは時間の問題だ。この数十年間、世間の話題になることも指名手配になることもなく彼女がこの国で生活していることから考えて、それは明白である。一体全体、これまでに報告された行方不明者のうち何人が彼女の栄養源となっていることか。そんな存在を相手に、僕に抗う術はない。

――一体いつまで、僕はこんな状態なんだろうか。

――いつまで、僕はあいつにひれ伏していればいいのだろうか。

――いつになれば僕は救われるのだろうか。

そんなことを頭の片隅で考えながら、僕は帰宅準備を継続している。

自分の机の上、学校に置いておくテキストと持ち帰るノート類を選別しながら、後者をカバンにせっせと詰め込んでいる。と、ふいに――

――カツンッ

軽妙な音が鳴った。

その音の方へ視線を向けると、床に落ちた僕のシャープペンシル。

僕は、それが自分の筆箱からこぼれ落ちたことに思い至り、

「……おっと」

慌てて、それを拾おうと手を伸ばした。

――その時、

急に目の前に現れた白い足とシューズ。

僕は危うく手を踏まれそうになった。

手を引っ込めつつ顔を上げると、スカート姿の女子生徒がじとりと僕を見下ろしている。まっさらな黒髪ロングヘアーに、長いまつげのせいで余計に釣り上がっているように見える目つき。気に食わない者共を言葉でばっさりと切りつけることから「居合抜き委員長」の名で親しまれて（恐れられて）いるクラスメイト、夜ノ崎桐（やのさききり）である。

夜ノ崎さんは、水素をも凍らせそうなほどの冷たい視線で僕を貫いた後、ぽつりと、

「……悪いけど、下、スパッツはいてるから、見えないわよ？」

「ち、違うよ！」

僕は手を横にブンブンと振りながら、慌てて立ち上がった。

……そう言えば、僕は今まで夜ノ崎さんと話したことは一度もなかったはず。夜ノ崎さんは学年屈指の有名人で、その噂を耳にすることは多々あったが、僕とは席が近くになることもなく、言葉を交わす機会が今までなかったのである。だから、今のがお互いのお互いへの第一声。まさか、こんな会話がファーストコンタクトになるとは……。

まあ、物好きな男達（主にマゾ気質な方々）に年がら年中追い掛け回されている委員長様だ、彼女の方からすれば、僕との初会話など気にするべくもないだろう――と思いながら、シャーペンを拾い上げつつ立ち上がると、目の前の夜ノ崎さんが急に伏し目になった。

両手を前で握り、何やら言いにくそうに、言葉を探すかのように、もじもじとしている。
一体どうしたのかと僕がその仕草を眺めていると、夜ノ崎さんはふっと顔を上げて、

「……あの、悪いんだけど、私、橘君のこと嫌いだから、近づかないでくれる？」
「……へ？」

しかし、僕にそれ以上何も言う暇を与えてくれないまま、夜ノ崎さんはくるりとターンした。そしてタッタッタと教室から出て行ってしまう。
シャープペンを握ったまま、呆然と立ち尽くす僕。
……な、何で？　何で僕はいきなり、そんなことを言われにゃあかんのだ？　僕と夜ノ崎さんは今まで話したことはない。行動を共にしたこともない。だから、嫌われるような機会すらなかったはずだが……。もしかして、生理的に嫌とかそういう話なんだろうか？
果たして僕はどこら辺にショックを受けるべきなのか――と呆けていると、

「むっふっふ。災難だったにゃー」

と、猫のように笑いながら僕の方に近づいてくる、別の女子生徒。
いつも夜ノ崎さんと一緒に行動している、ショートヘアーのメガネ少女。和束真弥乃（わづかまやの）だった。
和束さんは、うっすらネコミミが見えてきそうなほどににゃごにゃご笑いながら、

「むっふふ。いやあ、橘君っておとなしいし、桐に斬られるような要素はないと思ってたんだけどねえ。いやいや、桐も侮れないねえ」

「……う、うん」
「でも……どうだろ？　橘君も橘君で、ちょっと変わってるからにゃあ。桐は、そこが気に食わなかったのかな？　まあ、私は全然気になんにゃいけど」
「……え？　僕って、変わってるの？」
「うん。そこはかとなく、ね。……ま。桐と関わらずとも生きていくには問題ないから、気を落とさにゃいでくりゃれ」

そう言いながら、和束さんは猫を撫でるように僕の頭をナデナデしてくる。……もはや、どっちが猫か分かりゃしない。

「じゃ、そういうことで、またね～」

そう言って、和束さんはカバンを小脇に抱えつつ、手を振り振り教室から出て行った。そして廊下をタッタカとかけていく。恐らく、いつも通り夜ノ崎さんと下校するつもりなんだろう。

僕はまだ自失から立ち直れないまま、和束さんの背中を見送った。

第三話「十字架」

水曜日の夜。僕は塾からの帰路を歩んでいた。
時刻は七時。
夏も終わった九月中旬ということで、段々日も短くなってきている。一ヶ月前まではこの時間でもまだかろうじて明るかっただろうが、今では完全に夕闇。夜と呼んでも過言でないくらいに辺りは暗く、風も涼しい。
そんな夜道を、僕は制服姿のまま（高校から塾へ直行したのである）、一人とぼとぼと歩いていた。
雲がかった月を見上げながら、そう言えば〈あいつ〉に出会ったのも塾帰りだった――と思っていると、ふと、どこからともなくグチャグチャという、聞き覚えのある――しかし、耳馴染みはしない――音が聞こえてきた。
しばらくその場で立ち尽くしていると、ふいに、脇の路地裏から現れた人影。
黒いジャケットを盛大に赤く汚した、紅の髪の女性。生臭い匂いをまとい、満腹感に満たされた微笑を浮かべているシャルロットだった。
シャルロットは口元を腕で拭いながら、
「よう、羽樹。どうした、こんなところで？」
「どうしたも何も、僕は帰宅途中だ」
僕は肩をすくめながら答えた。
「……というか、あんたはまた飽きもせず〈食事〉か？」
「あっはっは。何を言ってやがる。食事に飽きるもクソもないだろ。まあ、食材に飽きることはあるがな」

当然のことのように言って笑うシャルロット。
僕は、シャルロットの服から滴っている血を眺めながら、

「……しかし、そんな派手に食い散らかして、警察とかにバレないのか？　血が道に点々と落ちてるじゃないか」
「ああ。まあ、心配ないさ。人通りが全然ないところで食ったし、食べ残しはしてないし、明日は雨みたいだし、な。見つかる前に洗い流されるさ」
「……と言っても、僕に見つかった前例があるじゃないか。それが警察だったらどうするんだ？　拳銃で狙われるぞ？」
「拳銃？　あっはは。んなもんでアタシが死ぬかよ。十数年前に一回、南の方で警官三人に囲まれたこともあったがな。全員食ってやったさ。ちっぽけな金属の弾なんかじゃ、アタシの体にかすり傷をつけるのが関の山だ。殺すなんて不可能に近いぜ」
「……そうなのか？　あんたの体、人間とたいして変わらないように見えるが」
「ふん、回復力が違うんだよ」

自慢げに言いながら、シャルロットは自分の細腕を見せびらかすように撫で始めた。透き通るような白い肌。女性一般と何ら変わらない柔そうな二の腕だが、そこには傷跡も何も残っていない。

「たいがいの傷は一秒足らずでふさがるし、たとえ貫通したって、ものの一分で元通りだ。アタシにダメージを残すなんて、ただの人間には無理だよ。……まあ、そのせいでアタシは大食いになっちまってるんだがな」
「なるほど、それで人食いか。……しかし、あんたは大丈夫でも僕はどうするんだ？　こんなにあんたと通じてて、僕がしょっぴかれる可能性だってあるだろう」

「お前がアタシについてリークするってのか？　んなことしてみろ。お前の家族も友達も知り合いも一人残らず食ってやる――――って、そう言ってるだろ？」
「いや、だけど、向こうは向こうで国家権力なんだ。僕にゃ逆らえないよ。捕まったら、僕にはどうにもならないさ」
「う～む……そうか、お前もお前で危険ってわけか。確かに、今お前が捕まるとアタシも困るなあ。あのゲーム、まだクリアしてないし、う～ん……」

考え込むように、シャルロットは腕を組んだ。そしてひとしきり頭をくるくる回した後、ぽんと手を叩いて、

「……よし、じゃあ、お前にこれを貸してやろう」

そう言って、シャルロットは首にかかっていたペンダントを外した。
それは、シルバーのチェーンに黄金色の十字架がついたもの。月明かりに照らされ、鈍く輝いている。シャルロットから手渡されたその重みは予想以上で、僕は危うく取りこぼすところだった。
その十字架を僕はひょいと摘み上げながら、

「……これは？」
「便利アイテムだ。それ、縦に引っ張ってみろ」

言われて、僕はクロスの上と下を摘んでそのまま引いた。スポッと二分する十字架。その間から、ナイフのような刃が現れる。

「何これ？　……ナイフ？」
「ああ。つっても、オモチャみてえなもんだがな。しかし、あった方がマシだろ」

「マシって言ったって……」

僕はその切っ先を月に照らし、まじまじと眺めてみた。

そもそも、この十字架のペンダント自体が十五センチ程度の長さだ。この刃は十センチもないだろう。親指より少し長い程度だ。一体――

「――こんなちっこいナイフで、どうやって警察に対抗しろって言うんだ？　オモチャみたいなもんって、まんまオモチャじゃないか。まだハサミの方が役に立ちそうだが……」

「あっははは。見た目で判断するなよ。……そうだな。ほれ、こっち見ろ」

言われて振り向くと、シャルロットは小石を拾い上げ、それを僕に向かって思いっきり投げつけてきた。

僕は思わず、ナイフを握ったままの右手で顔をかばう――――と、

――カツンッ

何かにぶつかったような音がして、僕の眼前で石が弾けとんだ。右手には何の感触もなかった。しかし小石は、飛んできた方向とは逆にアスファルトの上をころころ転がっていく。

「……？　何が起こった？」

「そのナイフが弾き返したんだよ」

シャルロットが僕の手元を指差し、からから笑いながら答えた。

「そのナイフには少しばかり魔力が流れててな。ただの鉄よりかは頑丈だし、防御壁も作ってくれる。だから鉄砲で撃たれても、それでかばえばたいがい防御できるぜ。心強いだろ？」

「う、うん……」

「つーわけで、それがありゃお前も安心だ。ちゃんと身に着けておけよ？　じゃな」

そう言って、背中越しに手を振りながらシャルロットは路地裏から出て行く。

闇の中に一人取り残される僕。

――魔力

そんなことをいきなり言われてもピンとはこないが、しかし人食い女が言うことだ。信じる、信じない以前の問題だろう。そもそも、シャルロット自体がアンビリーバブルな存在である。

僕は、赤く染まったアスファルトを見下ろし――――ぞくりと身震いしながら、十字架のペンダントをポケットにしまった。

第四話「体育」

今日の五時間目は体育だった。
男子は校庭でサッカー。クラスを二分にして、フルスペースで試合を行っている。
前述の通り僕は元陸上部で、走ること自体は苦手ではなかったが、だからといって運動神経が目を見張るほどいいわけではない。とかく、球技は苦手なのである。なので、この試合において僕は言うなれば足手まとい。ディフェンスを任されたのだが、その職務をほとんどまっとうできずに、さっきからずっとニワトリのようにボールを追いかけているだけである。
僕の方へドリブルしてくる、相手チームのサッカー部員。
僕は慌ててその行く手を阻んだが、簡単に横を抜かれてしまう。それでも必死に追いかけて、敵方のパスを何とか遮った。サッカー部相手にこれくらいなら、僕としては上出来だろう。
エリア外へボーンと弾かれ飛んでいくボール。
僕はそれをを取りにかけていった。
校舎の影まで飛んでいってしまい、一体どこまで飛んでいったのかときょろきょろ探していると、校舎脇の水のみ場へ迷い込んでいるのを発見。僕はそれをひょいと拾い上げ、そして――
――その横に体育座りしている生徒に気づいた。
壁に寄りかかっている、肩下まで伸びた黒髪を風に流している女子。上下ジャージ姿の夜ノ崎桐だった。

「あ、夜ノ崎さん、見学なの？」
「……」
「具合悪いの？　風邪？」
「……」
「そんなところに座って、暑くない？」

「……」

何も答えない。どころか、僕を避けるように顔を背けている。

……確かに嫌いとは言われたが、何もしてないのにここまで無視されるとは。もう、どうしたらいいのか分からない。

と、

「お～い、早くボールくれ！」

「あ、ゴメンゴメン」

コートの方から僕に手を振ってくるクラスメイト。

僕は慌ててボールを投げ返した。

ちらりと再度夜ノ崎さんの方を見ると、まだそっぽを向いている。

もう、この人との会話は諦めよう――と、僕もコートの方へ駆け出そうとすると、

「あ、橘君」

軽快な女子の声が聞こえてきた。

振り返ると、体育館の窓から顔を出したメガネ娘。和束さんだった。

和束さんは口をにんまりとした笑顔を浮かべながら、

「どうしたの、橘君？　こんなところで？　サボり？」

「ち、違うよ。ボールを取りにきただけだよ」

「ボールないじゃん」

「投げ返した後なんだよ」

「ふ～ん、ま、一応信じておくけど」

「……何でそんなに僕は信頼がないんだ？」

ふいに、僕と和束さんのやり取りの横で、夜ノ崎さんが立ち上がった。そして、この会話に辟易したかのように、すたすたと遠くへ歩き出す。
和束さんはそれを見やりながら、
「ま、桐はちょいと変わり者だからにゃあ。あんま気にしないで」
「う、うん……」
僕は声だけで答えた。
そんな僕を、和束さんはいぶかしむように眺めてきて、
「……う～ん、前も思ったけど、橘君って感情を表に出さないよね？」
「……そう？」
「うん。桐に『嫌い』って言われた時も、あんまりリアクションとらなかったよね？　……もしかして、橘君って不感症？　だとしたら、橘君の彼女になるのも考え物だにゃあ」
「いや、変なこと言うな。単に――――僕はそういう反射神経がないだけだよ。何も感じてないわけじゃない」
「そっか。……それでも、そういうのは気をつけた方がいいよ？相手としたら、君が何を考えてるのか分からないんだから。こっちにしちゃあ、正直怖かったりもするもんだよ？」
「……へいへい。今後は気をつけます」
僕が肩をすくめながら答えてると、
「お～い、早く戻れ～！」
と、体育担当教師の声。
僕は肩をびくつかせつつ、

「じゃ、じゃあ、そういうことで」

と、いい気味だと言わんばかりに悪そうな笑顔を浮かべている和束さんに手を振りながら、グランドへ戻っていった。

第五話「目撃」

いよいよもって、受験勉強も本格化してきた。

塾の教室の雰囲気も日を追うごとにピリピリしてきている。最近は授業中の講師の雑談が少なくなってきているし、指されて答えられなかった時の先生の捨て台詞もトゲのあるものに変わってきてるのである（例――「きちんと復習しておくように」→「お前、やる気あんのか？」）。……本当、胃が痛い事この上ない。

しかしまあ、これもごく自然な流れだろう。

なんせ、センター試験までもう残り四ヶ月をきっているのだ。

別に僕は、難関大学を志望してるわけじゃない。そんな大それた学歴を望んでるわけではないのである。あわよくば近所の国立大学に受かれば――と思ってる程度だ。僕は、この大学受験なる苦行にそこまでのモチベーションがある人種ではない。

しかしながら、現実問題、学費の問題から、国立に受かるか私立に行くかで家での居心地の良し悪しが変わってきそうなことは何となく予想できている。二年後には妹の大学受験も控えているので、僕の進路が少なからず妹の将来にまで影響を及ぼすのである。

なので、自分ができる最低限の布石は打っておこうということで、現在の僕は粛々と学業に精を出しているのだ。妹のため――というよりかは九分九厘自分自身のため、これからの数ヶ月は勉強に専念したい所存である。僕の人生における最初の頑張りどころなのだ。気合を入れねばなるまい――

――なんて言ってはみたが、当てごとが向こうから外れるのが世の常。

実際のところ、現在の僕は今ひとつ勉強に身が入ってない。この重要な時期にマンイーターなんて奇怪な存在に出会ってしまったせ

いで、勉強に集中しきれていないのだ。逆に邪魔されて、成績も伸び悩んでるくらいである。何でこの時期に、こんな存在に出会ってしまったのか、神や仏を恨みたくなるのも無理はないだろう。『マンイーター』と書いて『はた迷惑』というルビを振ってやりたいくらいだ。

――そう言えば、

今日の帰り際、数学を担当していた若い男の塾講師が

「夜道には十分気をつけるように」

と、結構な真顔を作って言ってきた。このところ、この周辺で行方不明者が五人も出ているのだそうだ。

同じ部屋で授業を受けていた女子達は、その話を聞いて

「誘拐か何かかなあ？」

「怖いね～」

「一緒に帰ろう」

と戦々恐々としていたが――しかし僕は、それを聞かされてがっくりと肩を落とすことになる。その犯人のことは知ってるし、行方不明者達が一体今どこにいるのかも分かりきったことだからだ。

言うまでもなく、これはシャルロットのこと。

――僕との初顔合わせの時

――食事に行くと豪語して僕の部屋から出掛けた時

――この前の塾の帰り道

とりあえず、五人中三人の行方は分かっている。すでにシャルロットの胃袋の中だ。シャルロットが口を割らない限り、彼ら彼女らは永遠に行方不明のままだろう。

……本当、どうすればいいんだ？

あいつが警官三人に囲まれて生き延びたなんて話を聞かされた後

では、余計に警察に駆け込みにくくなる。そもそもマンイーターなんて話をして、警察が真面目に取り合ってくれるのかも未知数だし。それを証明する方法なんて、シャルロットを突き出す以外にないんだ。そしてそれは、ただの人間たる僕には不可能に近い。

はぁ……――と、人生に疲れた中年のようなため息をつきながら、いつも通りの閑静な夜道を歩いていると――いつだかのように、路地裏の方からひき肉をかき混ぜるような音が聞こえてきた。

一瞬迷いつつもそちらへと進んでいくと、予想通りの光景。食事中のシャルロットだった。

シャルロットは、好物を与えられた犬のように手と口をせわしなく動かしながら、

「おむ、まへみ。もうみま？（訳：おう、羽樹。どうした？）」

「別に、ちょっとのぞいただけだよ」

僕は嘆息しながら答えた。

シャルロットはごくりと口の中のものを飲み込んで、

「つーか、レディが食事中なんだからさ。ちっとは気を使えよ」

「自分をレディと称するならもっと上品に食べれば……いや、そんな問題じゃないか。悪かったよ――――それより、あんた、最近食ってばっかしじゃないか？　こんだけ行方不明者が出たら、そろそろ目をつけられてもおかしくないだろう。あんた、いつここを出て行く気なんだ？」

「そんな、冷たいこと言うなよ。友達じゃんよー。もうちょいここにいさせてくれよ」

口を尖らせ、拗ねるように言うシャルロット。

「やっぱ、アタシと対等に話せるお前はレアだからな。正直言って、

お前のことは重宝してるんだよ。だから、ここは去りがたいっていうか、さ」
「重宝ね。……僕は、いつ食われるのかビクビクしてるってのに」
「うわっはは。そんな怖がるなよ。滅多なことがない限り、お前のことは食わねえから」

口を大きく開けて、シャルロットは高笑いした。
そして腕で口を拭うと――ぴちゃぴちゃ音を立てながら、血溜まりから出てくる。

「いやー、満腹、満腹。満足、満足」
「……えらい満悦顔だな」
「そらそうだ。最近じゃ、食うことだけが人生の楽しみだからな。誰かさんがアタシに構ってくれないせいでな」
「……何を言ってるんだ」

僕は嘆息しながら答えた。
シャルロットはそんな僕をカラカラ笑うと、「じゃな。またそのうち」と肩越しに手を振りながら路地裏から出て行く。
とことこと離れていくアスファルトを蹴る音。
数秒で、その足音も聞こえなくなった。
くるりと振り返り、僕はさっきまでシャルロットがしゃがみこんで食事に勤しんでいた地面を見下ろす――そこは真っ赤だった。いわゆる真紅の水溜り。あるいは深紅の水溜り。献血やらなんやらで多量の自分の血を見たときは、誰だって少なからず血の気が引いてしまうものだが――しかしここまでの惨状だと、もはや何も思わない。何も思えない。……これは、シャルロットの食事を四回ほど目撃して慣れてしまったせいなんだろうか？　それともただ麻痺してるだけなんだろうか？　もしこの現場を他の誰かが見たら卒倒して

しまうのだろうか？
ふと、僕は空を見上げた。
星も月も見えない。今夜の夜空は完全な黒ではなく、少し赤みがかっている。雲で覆われているのだ。天気予報では、確か明日は雨だと言っていた。
……そうか。だからシャルロットは、今日〈食事〉を敢行したんだ。
明日雨が降れば血が洗い流されるから――余計な混乱が生まれないから、今夜という時間を選んで食事をしたんだ。この前の時もそうだった。
とりあえず、遺体がすべてシャルロットの腹の中で消化される以上、この現場以外にシャルロットの所業の証拠はない。つまり、今夜一晩この場所が見つからなければ証拠はすべて消え去ると言うことだ。おまけにここは街頭もない路地裏。ここを真っ直ぐ行っても廃ビルに突き当たるだけである。深夜に、好き好んでこんなところに来る人間などいないだろう。だから、この惨状は見つかりようもない。これはもはや完全犯罪だ。
僕はそんなことを思いながら――そして、そろそろ僕も家に帰ろうと思いながら――くるりと方向転換しようとすると――

――ドサッ

まるでカバンが地面に落ちたような音。首を回し、音がした方を向くと、想像通りの地面に落ちたカバン。そして闇の中に立ち尽くす、一人の女の子。
――驚愕の表情をした、和束さんだった。
「な、な、なに、そ、それ……」

暗くてはっきりとは見えてるわけではないが――目を見開き、肩をぶるぶる震わせ、視線を赤い地面に向けている。

「そ、それ、もしかして……血？　血なの？　そこの赤いのは、血なの？　生き物の血なの？」

やばっ――と一瞬思ったが、しかし僕はすぐに冷静さを取り戻した。このリアクションからして、和束さんは〈この血溜まりに驚いただけ〉だ。この惨状に驚愕しただけだ。シャルロットに驚いたわけじゃない。シャルロットの行為に驚いたわけじゃない。シャルロットには出くわしてないはずだ。そもそも、あんな服を真っ赤に汚した人間とすれ違えば、その時点で発狂してるだろう。

「……な、何で？　道で橘君を見かけて……声かけようと思ったら路地裏に入ってって……それを追いかけてって……そしたら、何でこんなことになってるの？　これ……血でしょ？　こんな、たくさん、何でこんなところにまかれてるの？」

「い、いや、僕にも、その、よくわからないんだ」

今までのテストでもなかったほどに頭を超高速でこねくり回しながら、僕は言い訳を考える。僕を無関係だと信じさせる、そして和束さんを納得させる言い訳を。

「……その、道を歩いてたら、変な物音が聞こえてきたからさ、何だと思って覗いてみたら、こんなことになってたんだ。だから、僕にもよく分からない」

「ねえ、その血は、何の血？　犬？　猫？　ネズミ？　それとも……人間？」

「い、いや、さすがに人間はないんじゃないか？　人間がこんな出血してたら大事件になるだろう。ここには血以外残ってないってこ

とは、被害者は自力で移動したか、加害者が移動させたかだが。……こんなに血を流した人間が自分で移動できるわけもないし、そんな血まみれの人間を運んだらすぐに大騒ぎになる。すぐそこは繁華街なんだから。……多分、大型犬か何かが死んだまま放置されてて、それをカラスなんかが食べてたんじゃないか？　いや、カラスがイヌの肉を食べるもんなのかはよく知らないけど。それでも、他の、何か、肉食の動物がつっついてたんだろう。僕が聞いた物音ってのは、恐らくその〈食事〉の音だったんだ」

「そ、そんな……」

よろりと、和束さんは一歩後ろに下がった。そして吐き気を抑えるように、両手で口を覆う。

僕は和束さんに歩み寄りながら、

「とにかく、こんなのは見るもんじゃない。早くここから出よう」

そう言って、手を差し出す。

しかし、和束さんはその手を取ることなく――怯えるような目を〈僕〉に向けてきて、

「……な、何で？」

「え？」

「な、何で橘君は、そんな平気なの？」

「……平気？」

「そう。そうよ。何で君は、こんな光景を見ても冷静でいられるの？　普通でいられるの？　お、おかしいよ」

まるで殺人鬼にでも相対したような畏怖の表情を僕に向けてくる和束さん。唇を震わせながら、言葉を続ける。

「おかしい、おかしいよ、おかしすぎるよ。前も言ったけど、橘君はおかしいよ。何で驚かないの？　何で慌てないの？　何で無感情なの？　無感心なの？　無表情なの？　おかしいよ。普通じゃないよ。変だよ。変だよ。変だよ。何で、この状況がまるで日常だとでも言うような反応なの？　見慣れてるようなリアクションなの？　見飽きたようなレスポンスなの？　もう、なんか、おかしいよ。もう、本当、本当、本当、なんか、なんか、なんか――――怖いよ」

そこまで言うと、和束さんはカバンを拾い抱きかかえ――そして僕から逃げるように、路地裏から駆け足で出て行った。

僕は思考の整理がつかないまま、それをぽかんと見送る。

――再度、血の匂いが立ち込める闇の中に、僕は一人取り残された。

第六話「嘘」

――僕の腕が千切られる。
――僕の脚が千切られる。
――痛い。
――痛い、痛い。
――僕の手が千切られる。
――僕の足が千切られる。
――痛い、痛い、痛い。
――痛い、痛い、痛い、痛い。
――僕は泣く、わめく、叫ぶ。
――しかし、目の前の〈そいつ〉は食べるのを止めない。
――止めてくれない。
――どれだけ叫んでも、〈そいつ〉は聞いてくれない。
――どれだけ訴えても、答えてくれない。
――貪るように、僕の足を手を脚を腕を食べ続ける。
――痛い、痛い、痛い、痛い、痛い。
――〈そいつ〉はあんぐりと僕の眼前で口を開けた。
――それは元々なのか血のせいなのか分からない程、真っ赤な口の中。
――その犬歯が僕の首筋に触れる。
――冷たい感触。
――背筋に悪寒が走る。
――僕は食われる？
――僕は喰われる？
――僕は死ぬ？
――僕は殺される？
――歯が肉に食い込んだ。
――痛みが走る。

そして――

――僕の意識は途切れて……

「う、うわあぁぁ！」

僕は顔を上げた。

眼前にあったはずの〈あいつ〉の顔は消え去り――周りの風景は見慣れた教室へと移り変わった。

「……はあ、はあ、はあ」

荒くなっている息を落ち着けながら、僕は改めて今の状況を確認する。

ここは僕の自教室――しかし、空っぽだった。僕以外には誰もいない。廊下の向こうから喧騒は聞こえてくるが、この部屋は無音だった。

……どうしてだ？　何で僕以外に誰もいない？　何で僕だけ取り残されている？

僕は記憶をさかのぼった。

確か――僕は昼休みに、一人で教室で昼食を食べていた。そして満腹感とあいまって眠くなり、そのまま机に突っ伏して――

僕は慌てて壁掛け時計を見上げた。時間は一時十八分。五時間目が始まる二分前だ。ええと、次の時間は――

――そうだ！　音楽だ！

音楽室へ移動教室だ。だからみんないないのか。僕も早く行かなきゃ。

僕は慌てて机から音楽の教科書を取り出す。

そして椅子から立ち上がろうとして――後方に人影があることに気付いた。
僕と同じ取り残され組はいったい誰だ――とその人影をよくよく見ると、それは夜ノ崎さんだった。
夜ノ崎さんは落ち着いた所作で教科書や筆箱を机から取り出し、すくっと椅子から立ち上がった。そして机と机の間を歩いている途中、ようやく僕の存在に気付いたように、僕の方に視線を向けてきた。

「あ、次、移動教室なんだよね？　早く行こう」
「……」

夜ノ崎さんはやはり無反応。おかげで僕の発言はただの独り言になってしまった。
しかしまあ気にするのも今さらか、と思いながら僕も立ち上がった。そしてその拍子に――
――コツン
何かが落ちた。床を見ると、シャルロットにもらった十字架のキーホルダーが転がっている。胸ポケットに入れておいたのが落ちたんだ。
この十字架、その実は魔力の通ったナイフである（らしい）が、見た目はただのキーホルダーだ。というか、僕的にもただのキーホルダーである。失くしてしまうとシャルロットに何か言われるだろうが、しかしそれ以外には特に何もないだろう。何のこともなく、僕はそれを拾った。
しかし――

「――橘君、そ、それ……」

夜ノ崎さんが口をきいた。

びっくりして顔を上げると、夜ノ崎さんが目を見開いてこちらを見ている。
その表情を見て、僕も夜ノ崎さんを見つめ返してしまう。
無言で見合うこと四秒。微動だにせず、もはや人形のような固まっている夜ノ崎さんに、僕は
「……あ、あの、どうしたの、夜ノ崎さん？　早く行かないと、授業始まっちゃうよ？」
「……た、橘君、それ――」
夜ノ崎さんは左手で僕の手元を指差した。
「――その〈ナイフ〉、ど、どうしたの？」
「え？」
僕は危うく十字架を手から落としそうになった。
……な、ナイフ？　ナイフって言ったのか、今？　……な、何でだ？　何でこれを見てナイフだって分かるんだ？　知ってるのか？　というか、何を知ってるんだ？　何で知ってるんだ？　これはシャルロットの持ち物だったはず。シャルロットと何か関係あるのか？　シャルロットとどんな関係があるんだ？
そんな疑問群が頭をぐるぐる回りながら、僕は言葉を選んで、夜ノ崎さんに聞き返した。
「……これ、知ってるの？」
「そりゃそうよ。一番ポピュラーな〈魔具〉なんだから」
「マグ？」
「でも、ポピュラーって言っても、さすがに素人が簡単に手に入れることができるほどじゃない。プロがとりあえず護身用に持っているくらい。だから、それを持っている時点であなたがカタギではな

いことは分かるわ。確かにあなたに変な感じはあったけど――――ふん、やっぱりね。私の予想通りよ。今までは変に巻き込まれないように避けてきたけど、こうなったらしょうがないわ。……さあ、答えてちょうだい。それを一体どこで手に入れたの？　何で持ってるの？　あなたをそのかしたのは何？　どういう経緯でそこに到ったの？　そしてあなたは何者――」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。話についていけてない」

僕は手の平を夜ノ崎さんに向けながら、その言葉を遮った。

「さっきから、何の話をしてるんだ？　意味が分からない。最初からおいてけぼりだ。まず、そのマグってのは何だ？」

「……とぼけるつもり？」

ぎらりと、夜ノ崎さんが僕を睨みつけてくる。

僕はあたふたと、

「い、いや、そんなつもりはない。ほんと、本当だって。本当に知らないんだ。その『マグ』ってのは何なんだ？　それとも『マッグ』なのか？　『マク』なのか？　どんな字を当てはめるんだ？　というか、そもそも日本語なの？」

尋ね返す僕を、夜ノ崎さんは推し量るようにじっと見つめてくる。その目線に、何とももあキレイな瞳だなあ、なんて関係ない感想を浮かべていると、

「……まあ、いいわ。このままじゃ話が続かないし。その言葉、今のところは一応信じておいてあげる。説明してあげるわ。マグっていうのは、魔力の道具。略して魔具。魔力の通ったアイテムの総称よ」

魔力――確かにシャルロットも言っていた。このナイフには魔力があると。その力で、飛んできた小石が弾き飛ばされたんだ。

「その『クロス・ナイフ』は、軽くて安価で、そこそこの量の魔力も含まれてる。だから、平常時の携帯用としてそのスジに人間がよく持ち歩くものよ。店に行けば普通に売ってるしね」

……これ、売ってるのか。

「と言っても、そんな表には出回っていない。そもそも、魔具を扱う店自体が少ないしね。だから、それをキーホルダーのつもりで偶然買ってしまうなんてことは滅多にない。その店にたどり着ける時点でその人は素人ではない。何かしらの繋がりはあるはず。……さあ、話してちょうだい。あなたはそれをどこで見つけたの？」

「どこって、それは……」

僕は悩む――シャルロットのことを夜ノ崎さんに話しちゃっていいのか？　魔力について知っているってことは、もしかしたら夜ノ崎さんはマンイーターについても知ってるかもしれない。シャルロットのことを話しても、警察とは違って、ちゃんと信じてくれるかもしれない。

「……まだ大問題にはなってないけど、この周囲では失踪事件が多発してるわ。もしかしたら、あなたの情報がその解決に役に立つかもしれない。だから話して」

「えーと……」

「話してくれたら、あなたの好きなスパッツ見せてあげるから」

「い、いいよ、それは！」

「……どうしてもって言うなら、一つ、あなたにあげても――」

「僕はスパッツマニアじゃない！」

どんだけ僕はスパッツが好きなんだ！？　どこまでの変態なんだ、僕は。……というか、僕、夜ノ崎さんにそんな風に思われてたのか？　ショックだ。ショックすぎる……。

「とにかく、お願いだから話して。ね？」

「いや、その……」

僕は言い淀んでしまう。

シャルロット対策の仲間が増えてくれれば、僕は俄然嬉しい。渡りに船だ。しかし――問題は、これがシャルロットにバレないか、ということだ。なってったって、僕はシャルロットに素性も家も家族もばれてるんだ。ここで夜ノ崎さんに話したことがバレ、彼女に敵と見なされれば、僕は命を失う。家族を失う。友人までも失ってしまうかもしれない。つまり、僕の大切なものをすべて壊されてしまうのだ。

さすがに今シャルロットが僕を監視しているとも思えないが――――だからってその可能性がゼロだって言えるのか？　あるいは、僕の嘘を見抜くような能力をあいつが持っていないと言い切れるか？　あるいはあるいは、夜ノ崎さんに助力を請うたとして、シャルロットに勝てると言い切れるか？

分からない。

そしてリスクが大きすぎる。

今のままならば、たまに部屋に上がられてゲームを勝手にやられるくらいだ。それ以外には何もない。誰が死ぬこともない。食われることはない。しかしバレれてしまったら――もしくは負けてしまったら――僕はすべてを失ってしまうんだ。リスクが大きすぎる。期待値が小さすぎる。

一体どっちが正解だ？

どっちの選択が正しい？
分からない。
決断が下せない。
決まらない。決められない。
ふと、シャルロットの笑顔が脳裏に浮かぶ。
そして、〈食事〉の時の本能に侵された表情も。
その突き刺さるような視線を思い出し、
僕の背中に汗が一つ流れ――

「――その、期待を裏切って申し訳ないんだけど、実はこれ、〈道で拾っただけなんだ〉」
「……拾った？」
「そう。駅前の大通りの裏路地で。その……塾帰りの近道で、僕はたまにそこを通るんだ。そしてその道に落ちてたのを拾ったんだ。格好いいキーホルダーだと思って。あとでカバンにつけようと思ってポケットに入れといたんだけど。だから、その……魔力とかそんなのは、僕、全然分からなくて……」
「でも、あなた、さっき『これ、知ってるの』って聞き返してきたわよね？　文脈からして、どうもあなたはそれが〈普通じゃないモノ〉だってことを認識してるように思えたんだけど？」
「い、いや、それは、その……君はこれに見覚えがあるのか、というか。……つまり、『これの持ち主を君が知ってるのか』って意味だったんだ。だから、このキーホルダーの内実は、全然……。誤解させてしまったなら、悪かったよ」
僕は自分の口を他人のもののように感じながら、必死に言い訳を続けた。
と――
――キーン、コーン、カーン

「あ！　チャイム鳴っちゃった！」

僕は慌てて――というよりも、安堵しながら――振り返って時計を見上げた。一時二十分。五時間目開始の時間だ。

「授業始まっちゃったよ！　早く行こう！」

できるだけわざとらしくないように言いながら、僕は教科書を抱えて駆けだした。逃げるように、足早に教室の出口へと向かう。

廊下へ出ようとした間際、

「……ふん。まあ、いいわ」

という、夜ノ崎さんの捨て台詞が背中越しに聞こえてきた。

第七話「秘密」

『問二、性善説と性悪説について、あなたの考えを五百字以内で述べなさい。（二百点）』

……。

性善と性悪、ねえ。

人間の根本は善か、悪か？　悪意はどこからやってくるものなのか？

両方とも何百年も前に提唱され煮詰められてきた説らしいが、倫理の先生に言わせると、この問題はとかく難しいのだそうだ。いまだに答えは出でていない、あるいは存在しないのかもしれない。現在の教育システム上では性善説が前提にされているが、それはその方が収まりがいいというだけで、それが真実というわけではない。周りの人間が陰口を叩いている様を見る分には、むしろ性悪説を思想の根本に置いている人間の方が多いような気がしてならないもんだ。

しかし僕には、そもそもこの問い自体がナンセンスだと思えてならない。

善とか悪とか、そんなのは人間が作ったただの枠組み。ただのシステムの一つ。人間の行動原理をすべて記述するのは無理なんじゃないだろうか。

シャルロットを見てれば分かる。

彼女の出生が一体どんなものなのか、僕には知る由もないが――――しかし、彼女が人間と意思疎通を図る能力を持っているのは事実だ。僕のことを友達呼ばわりし、僕に付きまとってくる。僕に護身用のアイテムをくれたりもしたのだ。

だが、彼女は人間を食う。

人の息の根を止める。

人殺し――――それは人間社会ではまごうことなく『悪』に分類

される行為だが、彼女は許可なく悪意なくそれをやってのける。ただただ空腹を満たすためだけにその行いを続ける。自分の生命維持のためにそれをやってのける。

そこには善も悪もない。

善意も悪意もない。

あるのはただの――――食欲。

そうだ。理性なんてものをもっていようが、社会なんてものの中で生きていようが、人間だって動物の一種に過ぎない。結局、己の欲望に従って生きているだけだ。モラルだってマナーだって、自尊心やら社会的尊厳やらなんやら、それを守ることによって得られるものがあるから守るだけなんだ。倫理学なんてそんな高尚な問題ではなく、すべての行動は単純に損得で測れるようなものなんだ。

無意味な人殺しは許さない――――それを許せば、一つでも例外を作れば、社会は殺伐とし、安全な環境が作れなくなる。自分の身が危なくなる。自身の生命維持に支障が出る。だから許さない。

我が子を殺そうとする殺人犯を逆に殺すことはいとわない――――何もしなければ自分の最愛の血縁者が殺されてしまうのだ。その時に生まれる心的ストレスに比べれば、他者の命を奪う行為など逡巡することもない。願望にのっとり、この動作は遂行される。

欲望と願望に照らし合わせれば、人間の行動原理なんてスムーズに答えが出るんじゃないだろうか？

善も悪も、まったくもって無意味な概念なんじゃないだろうか？

……。

なんてことを書いたら、入試落とされるかな？

むしろ採点者に気に入られて――――なんてのは、期待薄か。

入試で失敗したら息苦しい浪人生活が待ってる。そんな危険を冒してまで試す勇気はないがね。そもそも、ただの入試課題の一問にここまで自分の善悪観念をぶつける気もないし。

僕は、パタンと机の上の参考書を閉じた。

そして椅子の背もたれに体重をかけ、うーんと伸びをする。

壁時計を見ると、とうに十二時を過ぎていた。すでに真夜中と言われる時間だ。両親も妹もとっくに眠ってるだろう。僕は九時に風呂から上がってそれからずっと机に向かってたから、かれこれ三時間勉強してたことになる。いい加減疲れたが、こんな生活もあと三ヶ月ちょっとだ。未来を少しでもマシなものにするために、これくらいは我慢しよう。

僕は体勢を戻しながら、机の上の皿――その上には水洗いしただけのキュウリが三本載っている――に手を伸ばした。二時間前に母さんが持ってきてくれた今日の夜食だ。僕は一本手に取ると、皿の端に盛られている味噌を絡めて、そのまま口に運ぶ。なんとも味気ないメニューだが、朝の胃の調子のことを考えれば、これくらいさっぱりしたものの方がいいのかもしれない。

シャクシャクと歯ごたえを楽しみながら、僕が再度問題集に意識を戻そうとすると、

――ガラガラッ

「おっす、羽樹。来たぜー」

ベランダから侵入してきた迷惑な声。

今まで折角集中できてたのに、これでぶち壊しだ。今日の勉強はこれで終わりだろう。

僕はキュウリをくわえたまま首を回し、

「まったく、お前は何でこんな時間に――」

「うぎゃぁあああああああああああああああ！」

シャルロットが奇声を上げた。

僕は慌てて立ち上がり、シャルロットに近づきながら、

「お、おい！　いきなり叫ぶな！　というか、一体どうした――」

「う、うわ！　ばか！　や、やめろ！　近づくな！　それ以上近づくな！」
「な、何だ？　近づくなって、何が――」
「頼む！　この……このとおりだから！　お願いするから！　だから〈それ〉をアタシに近づけるな！」

……〈それ〉？
僕はきょとんとし、次いでシャルロットの視線の先を追った。
シャルロットは僕の顔の下の部分――――僕の口を見ているようである。そして僕が今口にくわえているのは、みずみずしいキュウリで――

「――シャルロット、お前まさかキュウリが――」

――ドンッドンッ
いきなり、僕の部屋のドアが叩かれた。

『ちょっと、お兄ちゃん！　うるさいよ！　どうしたの？』
「あ、ごめん」

僕はドア越しの妹の声に答える。

「テレビの音量、間違って上げちゃったんだ。悪い、悪い」
『……もうっ。気をつけてよね！　こっちは寝てるんだから』

叱責の声の後、パタンパタンとスリッパの音がドアから離れていった。そして、隣室の扉が開閉する音が聞こえてくる。
……危ない、危ない。
というか、兄は来年の我が家の家計のために頑張ってるってのに、それはともすればあいつのためでもあるのに、それをまったくおも

んぱかってくれていない。可愛げがないもんだ。まあ、今に始まったことじゃないけど。期待もしてなかったし。
――もとい、
僕はキュウリを口から外し、再度シャルロットの方を見た。
シャルロットは床にへたりこみ目に涙を浮かべつつも、緑の物体が自分から離れたことに幾分安心したようにようやく落ち着きを取り戻したようである。

「……お前、キュウリが嫌いなのか？」
「嫌いなんてもんじゃねえ」

シャルロットは顔をしかめつつ、すくっと立ち上がった。

「見るだけで嫌だ。力が抜けちまう。半径三メートル以内には絶対に入れない」
「そんなに？　……ってか、何でそんなに嫌いなんだ？　こんなただの野菜が」
「『嫌い』に理由なんてあるかよ。強いて言うなら、生来、生理的に嫌いなんだ」
「なるほど。吸血鬼のにんにくみたいなもんか？」

僕は手に持った食べかけのキュウリを皿に戻し、さらにその皿をシャルロットから遠ざけるように机の端に動かしながら、

「しかし、意外だな。こんなもんがお前の弱点だったなんて」
「……他人に言うなよ？」

乱れた紅の髪を整えながら、シャルロットがキッと僕を睨みつけてくる。

「アタシはキュウリが近づくだけで魔力の制御が不安定になっちまう。これは、アタシに関する重大なシークレットだ。ぜっったいに、誰にも言うなよ？　言ったら絶交だからな」
「……わ、分かったよ。分かってるよ」

僕は、『シャルロットとの絶交』がどんなものなのかを具体的に想像しながら、こくりと頷いた。

第八話「彼女の部屋」

目を覚ますと、僕は武家屋敷みたいな部屋に横になっていた。
床はすべからく畳。全部で十二畳ある。出入り口は鶴と思われる鳥が描かれたふすまで、部屋の奥には掛け軸と黒い壺が飾られた床の間が備わっている。壁際には木製タンスが置いてあり、全体的に純和風な趣向だった。
……そう言えば、畳に寝転がるのも数年ぶりだ。
今の僕の家は三年前に建て替えたものだが、全八部屋中、和室は一つもない。全部が全部フローリングである。以前の家には三室ほど畳の部屋があったのに。
まあ、板張りの床の方が掃除が簡単だし、見てくれもいいもんだが――――畳も畳で嫌いじゃないな。日本人に先天的に備わっている感覚なのか分からないが、どことなく安心感がある。安らげる。何より、床にそのまま寝転がれるのがいい。こたつとの相性もばっちりだ。もし来年一人暮らしすることになったら、和室の部屋でも探してみようかな、なんて。
――さて、現実逃避はこれくらいにして。えっと、

……ここ、どこ？

見覚えはない。まったくない。そもそも、自分がどうやってここに来たのかすら分からない。目を開けたら、いつの間にか僕はここにいたんだ。
一応、六時間目までの授業を終えて、カバンを肩に掛けたまま校門から出ようとしたところまでは覚えてる。帰ったらどんな順番で勉強をしようか考えながら歩いてたんだ。しかし、学校敷地から足を踏み出した直後から分からなくなる。記憶が完全に途絶えるのである。

もしや、僕はテレポーテーションでもしたのだろうか？　それともタイムトラベルで未来の自分と入れ替わったとか？　それともそれとも、いきなり解離性障害でも発症したのだろうか？
何か手がかりはないかと、昔読んだＳＦ小説からそれらに関する知識を紐解いて、現状に関する疑問の答えを導き出そうとしたところで、

――ガラガラッ

「あ、起きたのね」

ふすまが開かれ、聞き覚えのある声が届いた。
首を曲げると、黒髪ロングヘアーでいつものつんけんした表情の夜ノ崎さんだった。図らずも私服姿である。制服姿以外の彼女を見るのは初めてだ。とは言え、白のセーターに紺色のロングスカートというシックな服装で、とりたてて驚きはしなかったが。家ではきっとこんな格好してるんだろうというイメージ通りの服装である。
そして手には湯飲みが二つと皿が一枚載ったお盆を持っていた。

「……夜ノ崎さん？　な、何でここに……？」
「何でも何も、ここは私の部屋よ」
「……へ？」

夜ノ崎さんの……部屋？　ここが？
僕は再度ぐるりと部屋を見渡す。
……いや、この和室が彼女の部屋であることには、別に異論はない。女子高生の私室としてはおおよそ平均とはかけ離れているだろうが、それでもこの人の性格から考えれば、なくもない話だろう。彼女がこの部屋で一人くつろいでいる姿も何となく想像できるし。それに、僕に夜ノ崎さんの嗜好に口を出す資格はない。

問題は――――何で僕は夜ノ崎さんの部屋にいるのか？
僕は夜ノ崎さんの家に遊びに行く約束をした覚えもないし、そんな予定もなかったはずだし、そもそも遊びに行こうと思ったことすらないはずだ。誰か女の子の家に行くとしたら、和束さんの家を選ぶだろう。そっちの方がまだ気兼ねがない。夜ノ崎さんのパーソナルスペースに侵入する勇気なんて、僕にあるはずもない。
僕はぐるぐると考えを巡らせているが――――夜ノ崎さんは僕の戸惑いを意に介することもなく畳の上に正座し、お盆を置いた。そしてその上の湯飲みの一つを僕の前に差し出してくる。

「どうぞ」
「あ、ども」

促されるまま、僕はお茶を手に取った。そしてズズッと一口飲む。
あっつい緑茶だ。
うん、落ち着く。……落ち着いてる場合じゃないのだが。しかしまあ、人間てのは事態が急転すると逆に冷静になってしまうもんだろう。おかげで、今の僕は色々とすごく寛容である。
夜ノ崎さんは、お盆に載っていた皿を差し出してきて、

「お饅頭もあるんだけど、いかが？」
「ああ、重ね重ねありがとう。ちょうど小腹がすいててね。いただきます」

僕は皿の上の饅頭を一つぱくつき、もぐもぐと口を動かした。

「いや、こんなにもてなしてもらって恐縮の至りなんだけどね、夜ノ崎さん、もしよかったら、君の気分を害さない程度に僕の質問に答えて欲しかったりするんだけど」
「ええ、折角の来客ですもの。喜んでお答えさせていただくわ」

「かたじけない。じゃあ聞くけどさ、その、えーとさ――

――僕は、何でここにいるのかな？」

僕の質問に、夜ノ崎さんは教室でも見せたことないようなニッコリ笑顔で、

「もちろん、私が連れてきたからよ」

「……どうやって？」

「単純なことよ。周囲に誰もいないことを確認した後、後ろから気付かれないように忍び寄って、鈍器と呼ばれる類の道具でもって意識がとぶ程度の打撃を後頭部に食らわせ、そのまま地面に倒れて動かなくなったあなたを背負ってここまで来たのよ。もう、あなた、案外重かったんだから。おかげで腕がしびれちゃったわ」

「そりゃあ、悪かったね。ダイエットするよ」

とりあえずのにこやかな会話。

学年屈指の有名人、夜ノ崎桐とこんなフレンドリーな会話をできるなんて（しかも、夜ノ崎さんの部屋で！）、僕はなんて恵まれた人間なんだろう。あと十年くらいは自慢話として使えそうだ。早速明日から使わせてもらおうかな。

でもまあ、今の話を聞く分には、夜ノ崎さんが僕をここまで連れてきた経緯っていうのは、例えようもないけれど、日本語で表すのが少しばかり困難だなあ、そのまあ、誤解を恐れずに言うなら、なんていうのかな、ええと、いわゆる一般的な――

――拉致？

「……そうだね。君が僕をここに連れてきた手際は、察するに、なんとも優れたものだったとは思うんだけどさ、一つだけ疑問が残

るとするなら、僕の同意を取った上で連れ立ってくるっていう選択肢は、なかったのかな？」
「面倒くさかったの」
答えながら、後光がさすような笑顔の夜ノ崎さん。
「それにそんなことしたら、ここでの話し合いが優位に進められないじゃない？」
「……優位？」
「ええ」
夜ノ崎さんは深く頷きながら、スカートのポケットから細長いものを取り出した。そしてそれを目の前に置く。
それは四十センチくらいの長さ。辛うじて片手で握れるくらいの太さである。色合いは黒だが、金属光沢を発している。そして先端には銀色の装飾がついていた。
似たようなものを、僕は日本史の資料集で見たことがある。江戸時代なんかに使われていたアイテムだったはずだ。この〈武器〉の一般名称は、確か――
――脇差、じゃなかったかな？
僕がそんな予測を立てながらその金属棒を見つめていると、エレベーターガールみたいなスマイルを浮かべた夜ノ崎さんは、無言でその脇差を左右に開いた。
そこから、まぶしいほどに輝いた刃がのぞく。
石をも真っ二つにしそうなほど、綺麗に磨かれた直刃だった。
……なるほどね。今の状況を確認すると、僕は窓のない部屋の中にいて、僕は丸腰である（いつの間にか、胸ポケットにあったはずのクロス・ナイフもとられている）。この部屋の唯一の出入り口は

ふすまだが、僕とふすまの間には夜ノ崎さんが鎮座している。さらに、夜ノ崎さんの手元には刃物。異存のはさみようもなく、完全に夜ノ崎さんが優位に立っていらっしゃる。

「どう？　今のあなたの状況が理解できたかしら？　できたなら、もう一度、前と同じ質問を尋ねさせてもらうわよ――――最近の失踪事件について、あなた、何か隠してない？」

夜ノ崎さんは正座のまま、上目遣いに――というより、睨みつけるように――僕を見上げてくる。

「……いや、だから、君の期待するようなことな何も知らないって――」

「信じられない」

「あのキーホルダーも、道で拾っただけで――」

「信じられない」

夜ノ崎さんは、にべもなく視線で僕を突き刺してくる。

僕は頭をかきながら、

「……というかさ、夜ノ崎さん。何で君はそんなに必死なんだ？　最近このあたりで不審な失踪が頻発してるのは知ってるけど、だからって何で君が調べてるんだ？　警察が捜査するのはわかるけどさ。見たところ、君は関係なさそうだけど？」

「それは――

――私が退魔師だからよ」

「……タイマシ？　って、それは、あの、魔を退ける、退魔師？」

「そう」

夜ノ崎さんは頷く。

「私の家は、代々この地域の魔を追い払うことを生業としてきたわ。災害の元凶を鎮めたり、悪霊を払ったり、そんな風にこの町を守ってきた。数百年前からね。そして、私はこの家の長女。上に兄もいない。高校を卒業したら、私がこの仕事を継ぐことになる」

「……そ、そうなんだ」

そう言えば、夜ノ崎さんが大学進学しないなんて噂を聞いたことがあった気がする。夜ノ崎さんは学級委員長に推薦されるだけあって、成績も上位の常連だった。そんな彼女が進学しないなんて、みんながみんな首をひねっていたが――――そういう裏事情があったのか。

「そして、最近起こっている失踪事件には不審な点が多すぎる。失踪者が煙みたいに消えちゃったのよ。何の痕跡も残さずにね。おかげで警察の捜索も行き詰ってる。これはもはや、『魔』による介入があるとしか考えられないわ――――そして『魔』が関わってくるなら、それを払うのが夜ノ崎家の仕事。私の仕事。だから私が調べてるのよ。……当初は、私もあなたに関わる気はなかったわ。というか、関わらせる気がなかった。だからわざと距離をとってたんだけど――――あなた、魔具を手に入れるなんて、思ってたより深く関わってたみたいね。私の知らないうちに。だったら、あなたから聞いてしまうのが手っ取り早い。そんなわけで、あなたに聞いてるのよ。分かった？　……さぁ。分かったなら、知ってることを洗いざらい吐いてちょうだい。この事件の早期解決のために」

「……いや、だから決め付けるなよ。本当に何も知らないって」

前にあれだけシラをきってて、いまさら白状できるわけもないだ

ろう。それに、こんな風に日本刀を目の前に出されては、白状したからと言って無事に帰してくれるのかも怪しくなってくる。

「……まだシラをきるつもり？　言っておくけど、この家は丘の上にぽつんとある一軒家だからね。隣家まで数百メートルあるわ。叫んだところで助けは来ないわよ」

……これは、完全に脅迫だ。

「さ、諦めて早く吐きなさい。痛い思いしたくないでしょ？　刀傷っていうのはね、思ったより痛いのよ。……それに、言ってくれたら逆にご褒美あげるから」

「……ご褒美？」

「そう。あなたの大好きなスパッツ」

またそれか！　ってか、まだそれか！

「それに、今なら――」

夜ノ崎さんはスカートの裾をそろりと持ち上げながら、

「――今穿いてるの、あげるわ」

あんた、私服でもスパッツ穿いてんのかよ！　――――って、ツッコミどころはそこじゃなく、

「だから、僕はスパッツが好きなわけじゃない！」

「別に今さら隠さなくても、私は全然気にしないし――」

「人の話を聞いてくれ！」

僕は力の限り叫んだ。
夜ノ崎さんは口を尖らせた後、ぎりっと爪を噛み、
「……くっ、スパッツでもおちないなんて」
「いい加減、そのキャラづけやめてくれ――――つうか、そこまで言うなら――」
「……っ！　白状する気になった？」
「い、いや、違うよ」
僕はブンブンと手を横に振る。
「あのキーホルダーとは関係ないけど、他の情報だ。実は僕、路上に血が大量にこぼれてるのを見たんだ」
「……ああ、先週の水曜日にあったってやつ？　大型犬か何かが食べられてたんでしょ？　それなら、とっくに真弥乃から聞いたわよ」
「いや、それだけじゃなくて、他にも二回見たことがあるんだ。似たような、血が飛び散ってる現場を」
「二回も？　どこで？」
「両方とも、駅前商店街の路地裏だ。一ヶ月くらい前の話だ」
「……どうして、急にそんなことを教えてくれるの？」
「へ？」
「何で〈このタイミングで〉その話をしてくるの？」
ぎらりと瞳を光らせながら言ってくる夜ノ崎さん。
……まったく鋭い。いや、僕が不自然すぎたかな？　まあどちらにしろ、この状況、僕にはこうする他ないだろう。
「いや、何か話さないと君が開放してくれなさそうだし。……それに、今まではあんまり気に留めてなかったんだけど、君の『魔』の話を聞いてふと結びついたんだ。もしかしたら失踪事件と関係ある

のかもってね。これが百パーセント関係してるなんて保障はできないけど、それでも君にとっては有益な情報になるんじゃないか？」
「確かに、ね」
顎に手をやりながら、夜ノ崎さんはゆるやかに頷く。
「とにかく、これだけが今の僕に思いつく情報だ。これ以上は僕を揺すってもさすっても金槌で叩き割っても、何も出てこないよ。頼むからもう帰らせてくれ」
「……分かったわ」
納得したのかしてないのか微妙な表情で、夜ノ崎さんはすくっと立ち上がった。

◇◇

夜ノ崎家玄関で。
「……じゃあ、この道を真っ直ぐいけば、駅前の大通りに出るわけだね？」
「そうよ」
「分かった。じゃあ、失礼するよ」
「うん、じゃあ、また明日、学校でね」
玄関に立って見送りしくれている夜ノ崎さん。
僕も手を振り返しながら、横開きのガラス戸を開いた。
……今日生まれて初めて女の子の家を訪れたわけだが、今まで抱いていた期待とはまったくもって正反対の状況及び結果だった。別

の意味でドキドキしっぱなしだったし。現実ってのはこんなもんなんだろうね。僕の家に初めて遊びに来た女の子もマンイーターだったわけだし。

ともかくも、高校入試直後以来の壮大な安堵感に包まれながら、僕は玄関を出て真っ直ぐ歩き出そうとした――――ところで、目の前に立ち尽くす一人の女の子を発見。

――和束さんだった。

学校帰りに直接来たんだろう、制服姿に肩掛けカバンといういでたちで立っている。眼鏡に夕日を映しながら、ぽかんとこちらを見ている。

夜ノ崎さんの家から出てきたばかりの僕と、その僕を玄関口で見送っている夜ノ崎さんを交互に見比べた後、顔を真っ赤にしたこの眼鏡少女は、

「……ごめん」

ぽつりとそんなことを言うと、くるりと僕に背中を向け、そのまま逃げるように走り去ってしまった。

――おいおい。

第九話「衝突」

一応、和束さんの脳内で自然発生した誤解については、夜ノ崎さんが次の日に解いてくれた。迅速に解いてくれた。何のことはない、たった一言で済んだのである。

曰く――

「――何で私が、こんなのと付き合わなきゃいけないの？」

和束さん（と僕）の前で、肩についたゴミを払うかのように言い放ってくれた。

……うん、確かに、こう言ってしまうのが最も手っ取り早いのは分かるけど。でも、何と言うか――――もっと他に言い方はなかったのかな？

まあ、これで解決するならそれでいいけど。

この誤解がそこら中に伝播する方が大変だ。

この、名の知れ渡った（学内限定）夜ノ崎嬢とのスキャンダルだなんて。

月が出てない夜道を歩けなくなるかも知れないし。

夜ノ崎さんは、僕が帰り際に数学の問題について質問してきて、それをわざわざ家にある分かりやすい参考書を参照しながら教えてあげた、という言い訳を用いた。

元は言葉をかけても無視されるくらいの間柄だったのに、何がどう転がって夜ノ崎さんが僕に対して急にそんな懇意丁寧に対応してくれるようになったのか、だいぶ無理がある理由だと思ったが……。しかし、和束さんは一応納得してくれた。完全には信じてもらえてないだろうけど、その辺は後で私がフォローしとく――――と、夜ノ崎さんも言ってくれたし。とりあえずのところ、これで僕にかかる損害もなくなるだろう。

めでたしめでたし。
僕の心情についてはめでたくなかったが。
ともかく、これにて受験勉強に集中するための障害になっていた悩みの一つは解決した。この一週間、夜ノ崎さんもあのキーホルダーについてあれ以上僕を追及しなくなった。残る悩みはたった一つだけである。もちろん、それは――

――シャルロットのこと。

こいつは相変わらずだ。
相変わらず、人が勉強してる最中に部屋に侵入してきてゲームに興じている。相変わらず、雨降りの前日には意気揚々と〈食事〉に出掛ける。相変わらず、「いつになったら出てくんだ？」と尋ねても「親友じゃん、もう少しいさせてくれよ。冷たいこと言うなよ」とすねながら返答してくる（いつの間にか友達→親友とランクアップしている部分については、僕は無視した）。
そして、相変わらず――
天気予報で明日の降水確率は七十パーセントだと言っていた日、塾の帰り道でバッタリと――実際に「バッタリ」なんて効果音が聞こえてきそうなくらい、バッタリと――頬に赤いペインティングがなされたシャルロットに出会った。

「おっす、羽樹」
「こんばんは。……というか、塾の帰り道によくも頻繁にお前と出くわすな。三回に一回は会ってるんじゃないか？　もしや、お前、狙ってたりするのか？」
「はっは。まっさかぁ。これは偶然――――というより、仕方ねえんだよ。この周辺で、人目につかない路地裏っていうのがこの辺りしかない。しかも、この路地裏を人が歩く時間は決まってる。そして、お前はその路地裏に沿って帰宅している。こんだけ条件が揃え

ば、三割くらい遭遇したって不思議じゃねえだろ。今年はありがたくも雨が多いし、な」
「……そんなもんかねえ」

僕はポリポリと頭をかきながら、月明かりに照らされたシャルロットの今夜の姿をまじまじと見た。
紅色のロングヘアーが何だかベダついている。これはともすればただ単に髪質が悪いだけのようにも見えてきそうだが、何のことはない、鮮血が降りかかっているのだ。色合いが近いせいで、暗闇の中では判別がつきにくいが。
表情はホコホコ満足顔。人が好物を腹いっぱい食べた時のそれである。違いがあるとすれば、白くてすっとしたそのほっぺたが赤く汚れているくらい。口元も、口紅をつけてるんじゃないかと思うくらいに真っ赤に染まっている。
シャルロットの化粧姿なんて見たこともないが（彼女が化粧なんてものをしたことがあるのかさえ疑問だ）、こいつがおめかしなんてしたら、僕もいくらかドギマギしてしまうかもしれない。ミテクレだけならば言うことはないんだが――――しかし彼女の行為は、それを覆して余りある。
まあ、ないものねだりしてもしょうがない――――と思い直しながら、僕が自分の家へ再度足を向けようとすると、

「とにかく、いい加減寒いし、早く帰ろうぜ」
「帰ろうって、僕の部屋にか？　あそこは僕の家であって、お前の家ではないと思うが」
「はっは、似たようなもんだろ」

そんなことを言いながら、シャルロットはバンバンと僕の背中を叩いてきた。
……こいつ、今夜も僕の部屋でゲームする気か？　それじゃ、今

日も勉強に集中できない。まったく。最近僕の成績が下がってきて、ついさっき塾の先生にこっぴどく叱られてきたばっかりだってのに。いやはや。

僕は嘆息しながら、しかし逆らうこともできずに、倣ってトボトボと歩き出した――――その瞬間、

――ドスッ

そんな生々しい音と共に、隣のシャルロットが後方へ――つまり、路地裏の方へ――と突き飛ばされた。いや、突き飛ばされたのか、吹き飛ばされたのか、殴り飛ばされたのか、蹴り飛ばされたのか、分からない。とにかく、飛ばされたのである。

驚いて振り返ると、シャルロットが靴と地面で摩擦を生みながら勢いを殺している。そしてその右肩には――――日本刀が深々と刺さっていた。

――な、なぜ日本刀？

そんなもの、無許可で所持するのは違法だし、裸で街中を持ち歩くのも異様だし、さらに言えば、人に投げつけるのは殺人行為だ。すべからく問題行動だ。

一体何事？　――――と僕がしばし動けないでいると、僕の横を人影が走り抜けた。僕の脇を素通りし、そしてシャルロットの方へ駆けていく。

その後ろ姿は、ショートヘアーで、女性の体躯で、耳の後ろから眼鏡のフレームが見えている。その顔の輪郭や体型からこの人が誰なのか何となく分かり、それは――

――和束さんだ！

満月に照らされたその服装は、白と赤の袴。あからさまな、日本の巫女さんの衣装だ。

そんな和束さんがシャルロットの方へ走っていく。その右手には、もう一本の日本刀。

「……くっ」

シャルロットは歯軋りしながら、肩から刃を抜き去った――そこからドボッと赤い血がこぼれる――シャルロットの血も赤かったのか――そしてシャルロットは、和束さんが振り下ろした刀を、肩から抜いたばかりのまだ血が滴っている日本刀でもって受け止めた。

――キンッ、キンッ、キンッ

三度交錯する刀。

ぎりぎりと二秒ほどツバぜり合いが生じた後――肩の傷のせいで、右腕に力が入らないのだろう――シャルロットが力負けし、

「……ぐあっ」

さらに後方へ突き飛ばされた。

それを和束さんが追いかけていく。

完全に、二人の姿が闇に飲まれた。

……なぜ、和束さんが？　何で和束さんがシャルロットを襲う？

そして何でまた、シャルロットと渡り合っている？　わけが分からない。

分からないが――――だからと言って、このまま放っておくこともできないだろう。無視して帰るわけにもいくまい。両方とも僕の関係者だ。

僕も二人の後を追って、路地のさらに奥へと踏み出そうとした、

その時、

――チャキリ

そんな金属音がした。

見ると、僕の顎の下で刃が輝いている。その刃が垂直に僕の首を向いている。

そして――

「――動かないで」

そんな涼やかな声が、僕の背後からした。

最近やたらと聞く機会が多かった女の子の声――――夜ノ崎さんの声だ。えっと、つまり――――夜ノ崎さんが、僕の首に刀をつきつけている？

ちらりと目線を横にもっていくと、僕の耳のすぐそばに、見慣れた黒長髪の仏頂面が見えた。舌を出せば僕の耳を舐めることができそうなほど、顔が近い。さも、僕に振り返る権限すら与えていないようだ。

「……や、夜ノ崎さん？　な、何で？」

「あなたの後をつけさせてもらったわ」

「僕の後を……？」

何で？　――――なんて考えるまでもないか。考えるまでもなく、分かりきったことだ。

夜ノ崎さんは、僕への疑いを解いたわけじゃなかったんだ。むしろ夜ノ崎さんの家でのやりとりのせいで余計に深まったと、そういうことんなんだろう。

僕が疑問を呈する前に、夜ノ崎さんが答えてくれた。

「あの時、あなたは『塾帰りの路地裏で数回血の海を見た』と言っ

ていた。もちろん、それはそれで有力な情報だけど、もう一つ別の可能性も示唆している。つまり、あなたはやっぱり真実を隠していて、実際はその『塾帰りの路地裏』で『魔』との接点がある、というもの。だからここ三回、あなたの塾の帰路をつけさせてもらったわ。今回何もなければ、あなたへの疑惑は一応シロにしておこうと思ってたんだけど――――最後の最後で露呈したわね。あなたが『魔』と関わっていること。そしてあなたがそれを隠していたこと。……ふん、まあ、見たところ、あの赤い髪の女も相当なモンだっていうのは分かる。だから、あいつに怯えてあなたは能動的に動けなかったっていうのも、理解してあげないでもないわ。あなた自身をどうこうする気はない。だから、とりあえず今はおとなしく見ていてちょうだい」

「な、何で――」

僕は刃が首筋に当たらないように注意しながら、口を動かした。

「――何で、和束さんがシャルロットに斬りかかっていったんだ？　あれ、和束さんだったんだよね？　いや、退魔師である君なら分かるけどさ。何で和束さんが……？」

「単純なことよ。真弥乃も退魔師だからよ」

和束さん……も？

「ええ。夜ノ崎家は、この街を管轄している退魔師の家系。そして和束家は隣街の管轄。やぶさかではない事件が起きた時は、お互いに協力し合っているのよ。これは私達の家の暗黙のルールみたいなもの。今回は、こっちから向こうに協力を仰いだというわけよ」

……そ、そうだったのか。そういうことだったのか。だから、この排他的な夜ノ崎さんと人当たりのいい和束さんが、あんなに仲よ

かったのか。

「……いや、しかし、和束さん、大丈夫なのか？　相手は人食い女なんだ。僕は、あいつが人間の骨を噛み砕いてる様を何度か見たことがある。あからさまな人外の力だ。そんな奴相手に、和束さん一人で大丈夫なのか？」

「ふん、だからこその退魔師なんじゃない。私達は小さい頃から、魔力の通った武器の使い方を習ってきたわ。それに、魔の者との戦闘もこれが初めてじゃないし。だから心配なんてする必要は――」

――ピチャ、ピチャッ

夜ノ崎さんの言葉の途中で、水溜りを踏みつける音が聞こえてきた。

顔を上げると、路地裏の暗闇から人影が一つ、ぬっと出て来る。

建物の影からはみ出し、ようやく月明かりの元に現れたそのシルエットは、ショートヘアーの眼鏡少女の生首を小脇に抱えた――

――シャルロットだった。

第十話「惨劇」

結果は、あっけなかった。
あっけなく、僕の目の前に示された。
シャルロットの脇の下、和束さんの首から下方が存在しなくなっている。肉が途切れてしまっている。固体がすべからく消え去ってしまっている。ただただ、ポツポツと赤い血が滴っている。ただ、それだけだった。
――そんな状態で、人間が生きていられるわけもないだろう。
和束さんは眼鏡をかけたまま、眠るように目を閉じている。いくらか髪が乱れているが、しかしそれ以外はいつもの彼女だ。首から上だけは、いつも僕が学校で見ている、猫のように笑う少女、和束真弥乃である。だが――――その下は、これ以上ないくらい変わり果てていた。
そうか。そうなのか。こんなあっけなく、彼女は十八年間の生涯を閉じてしまったのか。もはや彼女は、これ以上猫のように笑うこともできなくなってしまったのか。眼鏡をかける必要もなくなってしまったのか。なんて……なんてあっけない。
ふと僕は、コンクリートの血溜まりが、シャルロットの足元に三つできているのに気づいた。
落下する赤い水滴を逆にたどっていくと、シャルロットの右足と、和束さんの生首を抱えているのと逆の腕――つまりは右腕――に行き着いた。
シャルロットの右の太ももが、黒い革ズボンの上からざっくりと斬られている。
そしてシャルロットの右腕が、二の腕の中ほどから消え去っている。
切断箇所の検証なんて僕にできるわけもないが、しかし何となく、その二ヶ所は刀で切られた痕のように見えた――――まあ、疑いよ

うもなく、和束さんが斬ったんだろう。あからさまに、殺すこともやむなかったような攻撃の痕跡だ。
しかし、シャルロットは平然と立っている。
直立で、右の頬にしわを寄せながら笑みを浮かべている。
人間ならとっくに貧血で倒れているほどの血を垂らしているが、シャルロットはしっかりと地に足を――そして、血に足を――つけていた。足が震えている様子もない。余裕そうに、姿勢をまっすぐに保っている。

「……あ、あ、ああ、あ、」

ふと、僕の背後から、そんなうめくような声が聞こえてきた。
視線を下に送ると、さっきまで首筋に当たっていた刃がいつのまにか離れている。重力に負けたように、その切っ先は地面に届いていた。

「……ああ、あ、ああ、ああ」

なおも喉から声を出しながら、夜ノ崎さんが僕の背後から離れる。そして地面が揺れているかのような足取りで、フラフラと横に揺れながら、シャルロットの方へ近づいていった。
横目でその顔を見ると、口を開け放し、目を見開き、黒髪を逆立てて、放心したような表情。心ここにあらず、という表現が一番妥当だろう。

「あ、あ、あ……よ、よくも」

なおもシャルロットの方へ歩を進める夜ノ崎さん。腕を震わせながら、握っていた日本刀をゆっくり持ち上げ始めた。

「よくも、よくもよくも、よくもよくもよくもよくもよくもよくも、マヤノを、マヤノを、ま、やの、を」

月光を反射させるその刃が頭の上の高さにまで達し、そして——

「——よくも真弥乃ををををををおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

叫びながら、前に屈み、地面を蹴った。

おおよそ体育見学の常連とは思えないほどのスピードで、シャルロットの方へ駆けていく。刀が風をきる音がここにまで聞こえてくる。

夜ノ崎さんの叫び声なんて初めて聞いた、というか夜ノ崎さんにも叫ぶという能力があったのか——————なんて思考に到達する間もなく、夜ノ崎さんはシャルロットの眼前にたどり着いた。

そして真っ直ぐに刀を振り下ろす。

しかしシャルロットは、抱えていた和束さんの首をぞんざいに投げ捨てると、右に飛びながらその攻撃をかわした。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

夜ノ崎さんはなおも叫びながら、シャルロットの着地点へと横なぎに刀を振るう。

シャルロットは再度飛び上がり、この刃の軌跡をかわす。———その瞬間、プシュルッという音が聞こえて、シャルロットの左足から鮮血が飛び散った。剣筋をかわしきれてなかったのか。

しかしシャルロットはスタンッと静かに着地。一瞬顔を歪めたような気がしたが、それだけで、バランスを崩すような素振はない。

「うおおおおおおおおおおおおお！」

夜ノ崎さんの三度目の攻撃。シャルロットの額目掛けて、刀の先端を突き出していく。
これもまたシャルロットはかわす――――と思ったが、しかしシャルロットはその攻撃に対して左手を前に出した。そして、素手で向かってくる刃を握る。
ざくりと、刃が肉に食い込む音が聞こえた。
次いで、刃の動きがぴたりと止まる。

「……くっ」

歯軋りしながら、夜ノ崎さんが体を前後に揺らす。足と腕に力を入れ直し、刀でのそのまま貫くか、あるいは引き抜くかしようとしているのだろう――――しかし、刀は微動だにしない。

「くっはは。あめーぜ」

刃を握っている手の平から血が滴っているが、しかしシャルロットはあくまで嘲笑気味な笑顔を浮かべたままで、夜ノ崎さんの行動を眺めている。
――と、

「ふんっ」

シャルロットは、おもむろに刀を引っ張った。

「きゃっ」

勢いに負け、なすがまま、夜ノ崎さんの体が前へ倒れる。
シャルロットは夜ノ崎さんから引き抜いた刀を後方へ投げ捨てる

と、倒れてくる夜ノ崎さんの体を腕一本で抱きしめた。背中に手を回し、体を完全に密着させている。

「は、はなせ！」

夜ノ崎さんはわめきながら、両手両足でシャルロットの脇腹や足を殴り蹴る。

だが、シャルロットは動じる様子はない。ぎっちりと夜ノ崎さんの体を固定している。

そしてそのまま――

「――いっただきます」

――そんな意気揚々とした声を上げながら、

――あんぐりと口を開け、

――真っ赤な口をのぞかせ、

――犬歯を月に照らしながら、

――ご馳走を目の前にした子供のような嬉しそうな顔で、

――じゅるりと舌なめずりをしつつも、

――夜ノ崎さんの白い首筋に、

――勢いよく

――ざっくりと

――カブリツイタ

「ぎゃあああああぐあああがががああああああああああああああああああああああああ！」

夜ノ崎さんの悲鳴が夜道に響き渡る。

しかし、周囲から他人が駆けつけてくる様子はない。……そり

ゃそうだ。この路地裏は、シャルロットが何度も食事場として使ってきた場所だ。この時間、この周辺に人がいないことはすでに確認済み、そして実証済みなんだろう。
暗闇の中、目の前の二人のみが行動を継続している。
シャルロットの腕の中、じたばたともがく夜ノ崎さん。痛々しいほど必死にもがき続けている――――しかし、シャルロットは口の動きを止めず、何度も夜ノ崎さんの首に歯を立てる。ザクリ、ザクリ、ザクリ、ザクリと。

「ぎゃ、ぎゃ、が、あ、ぐ、が、あ、あ……」

シャルロットのアゴが動くたびに漏れる夜ノ崎さんの声。
刈り取られる血肉。
飛散する鮮血。

――僕はもう、何が何だか分からなくなった。
――眼前の事象に現実感はなかった。

クラスメイトであるはずの夜ノ崎さんも、シャルロットの腕の中では、もはやただのモノにしか見えない。見えなくなっている。見えなくなってきている。この光景が異質なのか、それとも僕自身が異質なのか。

「ぎゃ、あ……ああ……あああ……あ……あ……」

今まで三回ほど見たことがある、シャルロットの食事風景。
これが四回目。
今回は、そのメニューが夜ノ崎さんだったというだけだ。
ただ、それだけだ。

「……あ……あ……くぁ……あ……」

シャルロットの肩の上、痛みを精一杯訴えるように強張っていた夜ノ崎さんの表情が、だんだん力のないものになっていく。

「……あ……あ……」

声量も落ちていく。

「……あ……」

かくんと、力なくシャルロットの肩の上に落ちる夜ノ崎さんの頭部。

そして、静寂。

――こうして、夜ノ崎さんの声は、永遠に失われた。

最終話「帰路」

肉を食いちぎる音だけが五分程響いた後、シャルロットはようやく口の動きを止めた。そして、握っていた真っ赤な肉片をぼとりと地面に投げ捨てながら、

「あっはははははは。……ま、こんなもんだ」

高らかに笑った。

「……正直、今回は今までで一番やばかったかもしれないがな。なんせ、腕を一本持っていかれちまったしなあ。ガキのくせに。さすが、魔具を扱うだけのことはある。あと十年くらい経てば、相当な使い手になってただろうに。……だが、世の中そんな甘くねぇ。アタシに歯向かった代償は高くつく。これが現実ってもんだ。あっはははははは」

そう言いながら、シャルロットは右肩をさする。

つい十分前にはまだその下にあったシャルロットの右腕は、キレイに切り取られていた。そしてそれだけじゃなく、他の三肢からもボタボタと血が垂れている。足元の赤い湖の源泉としての割合は、シャルロットと夜ノ崎さん、どっちの方が多いのか、僕にはもう分からない。

「あっはははははは。……ん？　どうした、羽樹？　そんな、黙り込んで。強張った顔して。せっかくアタシが勝ったってのに。……あっはは、安心しろよ。お前のことは疑っちゃいないさ。お前がアタシの情報をリークしたなんて思っちゃいない。こいつら、キュウリ出さなかったしな。確かに、こいつらにあとをつけられたの

はお前の失態だが、責めるつもりはねえさ。だから安心し――」

――言葉の途中、シャルロットの体がガクリと右に傾いた。膝が砕けたように、バランスを崩す。

「……おっと、何だ、魔力がつきちまったか。今日は三食食えたってのに。……やっぱ、消化にゃまだ時間がかかるか」

シャルロットはそのまま脱力するように、どさりと膝から地面に倒れてしまった。

「……く、血ぃ流しすぎてっかな。回復に回す魔力が足りてねえ。あーくそ。……悪い、羽樹。ちょっとアタシをお前の部屋まで担いでってくんねぇか？」

シャルロットはコンクリートにうつぶせのまま、首だけ持ち上げて言ってくる。

「……ああ、ああ、心配すんな。こんなの一晩で治る。一晩ベッド貸してくれるだけでいい。頼む。親友だろ？　……うふふ。それに、ベッドに寝かした後は、アタシの体、お前の好きにしていいから。ちょっとしたサービスだ」

いつもの屈託のない笑顔で僕に言ってくるシャルロット。

僕は静かにシャルロットの傍らに近寄り、胸ポケットに手を入れると――

――そこから取り出したナイフを、シャルロットの背中に、ドスリと突き立てた。

もちろんこれは、数週間前にシャルロットから貰ったクロスナイフ、魔力をまとった魔具のナイフである――――僕に唯一可能な、シャルロットにダメージを与えることができる術だ。
シャルロットの心臓が人間と同様に左胸にあるのか――そもそも、シャルロットに心臓なんてものがあるのかどうかすら――疑問だが、しかし僕はそこに深々とナイフを突き刺した。

「ぐ、あ……な、は、羽樹？」

シャルロットがうめき声を上げる――――どうやら、ダメージは十分あるらしい。
僕はナイフを引き抜き、今の所の数センチ横に再度突き刺す。

「が……お、お前……」

ドスリ、ドスリ、ドスリ――――と、僕は何度も突き刺す。顔面に向かって血が吹き上がってくるが、気にしない。僕はただ無心で、腕だけを動かす。

「お、お前、親友、なの、に……」

シャルロットは声を上げるが、しかしそれ以上のことは何もしてこない。ナイフが刺さるたびに体が震えるが、それだけである。もう、体を動かす余力はないんだろう。

「が、は、は……あ、はは、あっははは。……なんだよ、くそ……やっぱお前は……ほんと……たいした……もん…………だ……」

そんなうれしくない褒め言葉を吐いたかと思うと、シャルロット

の体がぐったりと動かなくなった。
もう一度ナイフを振り降ろしても、何の反応もない。
保険としてさらに二十回ほど刃を振り降ろした後、僕は腕の動きを止めた。そして僕は立ち上がり、月に照らされたシャルロットの姿を見下ろす――――地面にうつぶせになり、右腕が切り取られている。残りの腕脚からも血を流している。さらには、背中に無数の穴。纏っているレザーの上着とズボンの九十パーセントが赤く汚れていた。
そして、動かない。
動かない。動かない。
まったく動かない。
見る限り、純然たる死体である――
――これは、僕が初めて殺した体……
……僕のこの行為は、果たして「殺人」なんだろうか？　こいつは、見た目はただの若い女性だが、その実はマンイーターなんだ。人間じゃないんだ。人間を食らう存在なんだ。僕の今の行動は、「人を殺す」ということと同義なんだろうか？
――この行為は罪なのか？
僕は罪に問われるのだろうか？　罰せられるのだろうか？　これが警察に見つかったら、僕はどうなるんだろうか？
僕は握っていたクロスナイフの柄を、シャルロットの上着でゴシゴシと拭った。そして、シャルロットの死体の脇にカランと転がす。
……この現場が見つかったとして、警察はまずシャルロットの身上について迷うことになるだろう。次いで、シャルロットの身体の性質について惑うことになるだろう。そしてシャルロットの胃の中を見て驚くことになるだろう。
和束さんと夜ノ崎さんの死因については、取りあえず解明されることになる。シャルロットが食ったことは明かされる。
じゃあその後は？
シャルロットの死については？

シャルロットを殺した僕については？
僕は突き止められるのか？
僕は罪に問われるのか？
……分からない
よく分からない。
しかし取りあえず、このクロスナイフから僕の情報は出てこないはずだ。元がシャルロットの持ち物だから、出所を探っても僕には関係ない。シャルロットと夜ノ崎さんと和束さんが亡き者となった今、僕がこのナイフを所持していたという事実を知る者は、僕以外には皆無のはずだ。
それに、シャルロットと僕の関係について知っている人もいないはず。今夜以外、こいつと二人でいるところを見られた記憶もないし、何かに映った覚えもない。シャルロットの行動について調べたところで、僕にたどり着くことはないだろう。
この死体から――シャルロットの存在から――僕が導きだされるはずはない。
僕が捜査対象になるはずもない。
だから、僕は大丈夫。
……いや、僕の想像よりも、日本警察の科学捜査ってのは優秀なんだろうか？　僕が和束さんと夜ノ崎さんのクラスメイトだということから簡単に僕に結びついて、何らかの証拠を掴まれるだろうか？　僕は捕まるだろうか？
……いやいや、そうだとしても、さっきまでの僕の状況を説明すれば、罪になることもないんじゃないか？　マンイーターという存在の恐ろしさ、そんな奴に見初められた不幸をかんがみれば、僕が刃を振るったことはしょうがないという見解にたどり着くんじゃないだろうか？　罪は問われないんじゃないか？
……分からない。
よく分からない。
どう考えればいいのか分からない。

……いや、分からないなら分からないでしょうがないか。どうしようもないか。捕まったらしょうがない――――だから、捕まらないという前提で伸び伸びと生活をした方が、今の僕にとって吉なんだろう。

そんな結論にたどり着き、僕は一つ、大きく嘆息した。

そしてぐるりと、シャルロットの死体と和束さんと夜ノ崎さんの首を眺める――――惨憺たる情景だが、しかし罪悪感はなかった。

……そりゃそうだ、元々僕は「悪意」に沿ってこの行為をしたわけじゃない。ただ、願望に沿って行動しただけだ。シャルロットから放たれたかった。放たれて、元の生活に戻りたかった。受験に集中したかった。それだけのために、僕はこの行動をしたんだ。

人間の行動に善も悪もありゃしないんだ。

ただ、願望が指針を示すだけなんだ。

シャルロットの「親友」という言葉に、何も感傷はなかった。

クラスメイトを二人殺されたことへの怨嗟もなかった。

元の生活とシャルロットを天秤にかけたら、生活の方が重かった。

受験の方が、僕にとって重要だった。

僕の未来にとって大切だった。

だから、僕はこういう選択をした。

それだけだ。

それだけのことだ。

僕はふっと夜空を見上げる。

星は見えない。

しかし、月は雲の隙間から辛うじて見える。

曇った夜空。

明日は雨だ。

そんな空を見上げて、ふと――――他人を何百人も殺したシャルロットと、一人の「親友」を殺した僕、一体どっちの方が「非道」だろうか、とかそんなことを考えながら、冷たい風が吹く紅色の満月の下、僕はトボトボと――

――帰路を歩みだした。

〈紅色の風月下　ＥＮＤ〉

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8446e/

紅色の風月下

2010年10月9日22時10分発行